

復元

東京駅、創建姿の3階建てに復元開始

東京駅丸の内駅舎保存・復元工事始まる

東京のシンボルである赤レンガの東京駅丸の内駅舎。現在の駅舎を生かしつつ、1914（大正3）年の創建当時の姿に復元する工事が4月にはじまった。工事に伴い駅舎内にある東京ステーションホテル、および東京ステーションギャラリーは営業を休止し、5年後の2011年（予定）に再開する予定だ。

当初3階建てだった駅舎は1945年に空襲を受け、1947年2階建てに修復されている。今回の復元は意匠、建材の復元から、耐震補強まで幅広い。

駅舎に使われたれんがは85万個。当時れんがを製造した都内の会社は昭和初期に製造を中止。

原料である愛知県知多市の粘土も枯渇していた。同じ風合いを出すため同質の粘土を探し、焼き具合も試行錯誤が繰り返された。

空襲によって焼失したドームは図面の大半が消失し、細部はほとんど分からない。当事の竣工写真、設計者である辰野金吾の現存する他の建物を参考にしてジェイアール東日本設計事務所が設計にあたった。

日本大学文理学部後藤範章教授（社会学）の研究室では、今年度のテーマとして「東京駅」を取り上げる。後藤研究室では東京の様々な風景を写真に撮り、社会学的見地から考察する活動を続けている。

3月26日、同研究室は東京駅周辺のフィールドワークを行った。皇居や丸の内のオフィス街と東京駅との関わりをつぶさに観察し、写真に収めた。その成果は11月末頃、『「東京」を観る、「東京」を読む』展にて発表予定である。



フィールドワークをする日本大学文理学部後藤研究室の学生たち

卒業制作展

「JACK」をテーマにジャンルを越えて193作品が集合
全国卒業制作展「てつそん2006」

全国のデザイン、芸術、建築系の学生有志が企画、運営、展示、発表をする「てつそん2006」合同卒業制作展が、横浜BankART Studio NYKとBankArt1929の2会場で行われた。今年で6年目を迎え、横浜での開催は今回で3回目となる。

本年度はテーマを「Jack」と銘打ち、デザイン、・アート系の学生193名が参加した。てつそん運営スタッフとしてOBの活動も加わり、オーストラリア・メルボルンからも出展された。参加校は昨年の29から41校と増え、193の作品が展示された。

参加者は、美術、映像、写真、建築、グラフィックと幅広い。展示についても優劣を競うものではなく、ジャンルの境界を設けず自由出展。JACKには、外部に積極的に発信し、アートを通して見る人に作者のメッセージを届けたいという意図が込められている。

広報活動は、準備の段階から市民との協力を得ながら行われた。出展の準備や、広報活動を通し、地域社会との連携、開場周辺の活性化、ワークショップ、講演など幅広い活動が展開された。

企画、運営、広報に至るまで全てが学生の自主運営でなされ

る。企画運営の実践の場にもなったようだ。卒業制作展は社会に対して学生生活の集大成を披露する場だ。会場では自身の作品について熱心に解説をする学生も見られた。



BankART Studio NYKの入口に設けられたみかんぐみによる「ハンガートンネル」